社団法人国際演劇協会（ITI/ ユネスコ）日本センターは、ユネスコ傘下の国際組織である国際演劇協会ITI（International Theatre Institute）加盟の公認団体です。ITI は世界平和と相互理解の促進を希求するユネスコ憲章の精神に基づいて、演劇による国際交流の増進を目的に 1948 年創設され、本部はパリのユネスコ本部の中に置かれて、現在 100 カ国以上が加盟しています。

（社）国際演劇協会（ITI/ ユネスコ）日本センター

I.T.I.

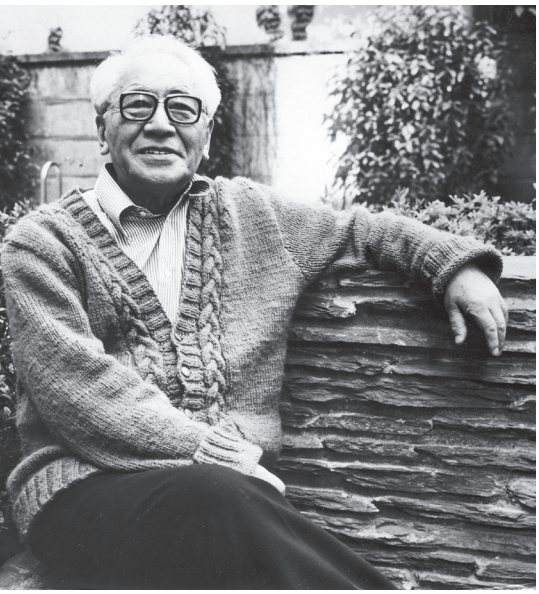
Japanese Centre of International Theatre Institute / UNESCO

I.T.I. NEWS 2012.1.15. No.122

スウェーデンの舞踏グループSU-ENに第19回内村直也賞

第19回内村直也賞はスウェーデンの舞踏グループ「ス・エンSU-EN」による『ルシオスLuscious（自然の中に漂う甘美なもの）』（振付・演出スザンナ・オーケルント）＝写真＝が受賞しました。授賞式は昨年10月22日、ストックホルムで渡邉芳樹在スウェーデン日本大使夫妻が臨席、賞金50万円が贈られました。『ルシオス』は8人のダンサーが自然賛歌と平和への祈りを表現したもので、舞踏をベースにした「移ろいの美」が高く評価され、内村賞委員会は最上位に推挙、理事国会議でも全理事の賛同を得ました。慣例では内村賞には舞踊よりも演劇ジャンルの作品が多く選ばれていましたが、「舞踏」はすでに日本文化の一ジャンルとして世界が評価しており、内村賞を当初の趣旨「日本の文化をもとに創作にとり組んだ海外の作品を奨励する」賞と位置づけることで一致しました。（報告・小田切ようこ）

日本文化を学び、舞台芸術の創作を



国際演劇協会日本センターの第3代会長の故内村直也氏＝写真＝の遺志によって生まれたこの賞は、日本が外国の芸術家を対象に毎年出している数少ない賞の一つで、海外で日本の文化を学び、舞台芸術の創作にとり組んだ作り手たちをサポートし、奨励することを目的としています。ITI / UNESCO の国際賞としての評価は高く、日本センターは創設以来この賞の管理運営の責任を担っています。

内村家から氏の遺志を伝えられた当時の国際理事・故戸張智雄氏が、１９９２年パリで開かれた第93回ＩＴＩ理事国会議に諮り、正式に国際賞として創設されました。賞の選考は当初、ＩＴＩ理事国会議に委ねられ、各国が推薦するプロジェクトを検討するというルールで進められてきましたが、現在は日本・スロヴェニア・スイスの３国による「内村賞委員会」で検討した結果を理事国会議で再検討することになっており、国際機関が世界的な視野から審査することに大きな意味と意義があるということができます。

賞の授与期間は当初、５年間に限っていましたが、内村家の強い意志によって第２次の５年間、第３次の５年間と継続され、現在第４次の５年間を迎えています。内村家の日本文化と舞台芸術に対する熱意は「平和を目指す芸術」というユネスコの理念にも通じ、世界の舞台芸術に関わる人材を発掘し、育てることで豊かな実を結んできています。

今回の審査経過と受賞作は昨年９月、中国・厦門（アモイ）で開かれたＩＴＩ世界大会全体会議の席で全世界に発表されました。

なお、ス・エンの作品は２００８年にもカール・リンネ（スウェーデンの博物学者）没後２３０年記念祭の折に創作した「カール・リンネへのオマージュ」が内村賞候補に挙がっています。

内村直也賞　受賞者・団体

▽ 1992　パリ俳優伝統研究会
▽ 1993　ハンガリーの演出家イシュトバン・ビンチェス
▽ 1994　ハンス・パゾヴィック率いるサラエボ・フェスティバル・アンサンブルによる『絹の太鼓』
▽ 1995　オーストラリアのプレイボックスシアターによる田中千禾夫作『マリアの首』上演
▽ 1996　ハワイ大学のジェイムス・ブランドン氏演出の『助六』上演をはじめとする歌舞伎研究
▽ 1997　リトアニアで翻訳上演された矢代静一作『弥々』▽ 1998　ウルグアイで翻訳上演された『夕鶴』
▽ 1999　ロンドン大学ロイヤル・ハロウェイ校の能楽研究に対して
▽ 2000　グアテマラ・オーストリア共同制作の『砧』を演出したアベル・ソラレス氏
▽ 2001　クリスティナ・ニグレン氏 (ストックホルム大学) の日本伝統芸能、祭と旅回りの大衆芸能の研究
▽ 2002　ルーマニア国立カラギアーレ劇場制作による近松門左衛門作『心中天網島』
▽ 2003　ホイクール・グンナルソン氏 (ノルウェー・アイスランド) による日本演劇研究と創作『弱法師』『班女』
▽ 2004　ドーン・アケミ・サイトー (アメリカ) のソロ・パフォーマンス『ブラッド・チェリーズ』
▽ 2005　該当者なし
▽ 2006　ジェローム・ヴァキエ氏の主宰するカンパニー・デ・リュシアル (フランス) の『羽衣』『隠狸』ほかのオムニバス作品
▽ 2007　スティーブストン能プロジェクト (アメリカ・カナダ・日本混成チーム) による英語能『かもめ』
▽ 2008　バングラデシュのコレクティブ・シアター・プロダクションの『米百俵』
▽ 2009　スロベニア国立マリボール・ドラマ劇場制作の翻訳能オムニバス『ウィンド・イン・パインズ』(松風)
▽ 2010　舞踏グループ　ス・エンによる『ルシオス』(スウェーデン)

より求められる公益性と財務の安定

「公益社団法人」設立総会へ向けて

平成23年度通常総会の議決を受け、国際演劇協会日本センターは公益社団法人への移行に向けて準備を始めることになりました。

当協会の場合は東京都知事に申請し移行認定を受けることになりますが、公益認定の要件は①公益目的の団体であるかどうか②経営の安定性が確保されているかの2点に要約されます。

①については、当法人の活動と実績、関係機関の評価から考えると、原則、問題ないものと考えられます。②については、収支状況、資産状況のほかに雇用の安定化（人材の確保）、業務遂行体制の整備（新体制への移行準備を含む）が必要となります。

財務と管理体制の要件を満たすためには新法人定款の案文作成、設立総会に向けて新しい理事候補の人選、理事会規則、職員就業規則、事務局組織規程等、法人運営に必要な規程類を整備する必要があります。

新しい公益法人制度の考え方では、監督官庁の指導を前提とするのではなく、法人自らが責任を持って自主的・自律的かつ安定的に運営を行っていけるように団体運営のルールを明確にすることが求められているからです。

設立総会は今年5月の通常総会、あるいは秋口の臨時総会を予定していますが、まず現社団法人を解散した上で移行することになります。解散については、現定款の定めに従い、総会で構成員の4分の3以上の賛成を得る必要があります。

スムーズな移行に向けて、会員の皆様のご理解ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

新公益法人制度とは　平成18年に公益法人改革のための法律が制定され、すでに平成20年12月から「新公益法人制度」が施行されています。これまでの社団法人は平成25年11月までに「一般社団法人」か「公益社団法人」のどちらかを選び、移行申請を行うことになっています。申請を行わない場合は法人解散となり、法人存続のためには避けて通れない関門です。当協会としては、平成23年度通常総会で公益社団法人への準備を進めることが承認されました。

この「新公益法人制度」導入の目的は「民間による非営利の活動を活発にし、民（みん）による公益を増進する」ことにあります（内閣府ホームページより）。

内閣府や都道府県に認められた「公益社団・財団法人」には、高い公益性が厳しく求められる一方で、法人税において公益目的事業が非課税となり（収益事業は課税）、公益法人への寄附者に対する寄附税制の優遇措置などが設けられています。

国際演劇協会平成23年度通常総会

公益社団法人への移行準備を了承

平成23年度国際演劇協会通常総会は、昨年6月18日（土）午後1時～2時18分、松竹株式会社大会議室（築地東劇ビル10階）にて開催されました。（報告・曽田修司）

出席者は165名（委任状提出者141名を含む）で、定足数の156名を上回ったので、総会は有効に成立しました。出席会員24名は次の各氏（五十音順・敬称略）。

秋葉ヨリエ、安孫子正、伊藤（舟本）巴子、大島信久、オーハシヨースケ、岡田恒雄、小田切ようこ（洋子）、かわはらゆな、小林弘文、斎明寺（関根）以玖子、真藤美一、曽田修司、高橋幸夫、高萩　宏、永井多恵子、西形節子、林　英樹、菱沼彬晁、堀川登志子、前田真里衣、松下芳江、松田和彦、吉岩正晴、和崎信哉

【配布資料】

1　平成22年度事業報告書（案）
2　平成22年度決算報告書（案）
3　平成23年度事業計画書〈案〉
4　平成23年度収支予算書（案）
5　法人改革に向けてのメモ

議長に理事の吉岩正晴氏が選出され、議事に入りました。

▽議案1及び議案2　平成22年度事業報告及び決算報告の承認

平成22年度事業報告書案に基づき、同年度に実施した事業の概要について、事務局から報告がなされました。東北関東大地震の影響で、3月に予定されていた「ITI世界の秀作短編研究シリーズ　イギリス・アイルランド編『巨匠の見た世界』」が中止となりましたが、それ以外の事業については予定通り実施し、それぞれに大きな成果を収めたことが報告されました。質疑の後、事業報告全体について全員一致で了承されました。次いで、同決算報告書（配付資料2，7～14頁）の収支計算書、正味財産増減計算書、貸借対照表、財産目録に基づき、平成二十二年度決算案の報告がなされた後、監事の舟本巴子氏より監査報告がなされ、質疑の後全員の了承が得られました。

【会員異動状況報告】

議案1に関連して、配付資料（6頁）により、平成22年度の会員の異動状況にかんする報告が事務局よりなされ、今年度四月一日現在の会員数は302名となりました。

▽議案3及び議案4　平成23年度事業計画および予算案の承認について

配付資料3（15～19頁）に基づき平成二十三年度事業計画（案）が、また、配付資料4（20頁）に基づき平成23年度収支予算案が提案され、全員の了解を得ました。

▽議案5

配付資料5「法人改革に向けてのメモ」（P21）に基づき、平成24年度の通常総会において公益社団法人への移行申請の議決を行うべく、今年度中に移行申請を行うための準備を行うことが提案され、採決の結果、賛成多数で了承されました。

このほか、今年度の事業計画に関連して、会員に対する連絡網の整備の必要性や、会員がより積極的に事業に参画する仕組みづくりなど、協会活動の活発化に向けての意見が複数の出席会員より表明されました。

総会は、真藤美一理事及び松田和彦理事を議事録の署名人に選び、午後2時18分に散会しました。

なお、総会配布資料をご覧になりたい場合は事務局までご一報ください。

多国間コラボの互助組織を

中国・重慶で「アジア演劇人連盟」発足

2011年10月11日、「アジア演劇人サミット」の開幕式で（重慶市のマリオットホテル）

①交流 Communication ②合作 Collaboration ③創造性 Creativity ④共益 Common-interest――四つの理念のもとにアジアの演劇人が昨年10月、中国・重慶に参集して「アジア演劇人サミット」が開かれ、「アジア演劇人連盟 Asian Theatre Alliance 略称ATA」の設立が宣言されました。中国文化部（文化省）と中国国家話劇院（周志強院長）の呼びかけに応えたのは、アジア18の国と地域のナショナル・シアター代表、芸術監督、劇作家、演出家、俳優、演劇研究家、制作者ら。その中で注目されたのはITI（国際演劇協会）会長のラメンデュ・マジュンダ氏です。開会式の冒頭、「グローバリゼーションと演劇人の役割」について講演し、参会者に感銘を与えました。また、「アジア演劇人連盟」のITI加盟について歓迎の意を表し、連盟発足後、常任理事に迎えられました。連盟の規約には、ITIとの連携が事業の柱として唱われており、ITI会長の出席はこの期待に応えたものと言えるでしょう。ラメンデュ・マジュンダ会長の講演とアジア演劇人連盟の概要を紹介します。

（報告・菱沼彬晁）

ラメンデュ・マジュンダーTI会長が常任理事就任

国際演劇協会加盟を視野に

「親戚はつき合うほどに親しみが増す」――周志強国家話劇院院長は中国の古いことわざを引いて、アジアの演劇人同士、もっと地理的、文化的、人的親近感を強めようと訴えました。ITIや国際ペンなどの国際組織は、ともすれば欧米偏重に傾くのを嘆く声がある中、アジア演劇人連盟とITIの関係強化、事業交流は世界の演劇情勢に一石を投じることになりそうです。

しかし、一口に「アジアは一つ」とは言い切れないのがアジアの国々の現状です。今回の演劇人会議は各国の文化的伝統と多様性をを尊重し、各国の法規を遵守するという申し合わせから出発することになりました。アジアの多種多彩な〝演劇資源〟を互いに享受し、アジア演劇の活力と存在感を高めながら欧米の演劇市場に伍していくにはどうすればよいか。このための互助機

関としての働きが、まず連盟に与えられた役割でした。

各国が力を出し合って、互いに高い芸術性を追求し、高度な専門レベルの共同作業が可能になるプラットフォーム（作業環境）を設置し、システム化しよう。これを常態化させることによって、ＡＴＡ各国センター間の関係がより親密になるのではないか。そして各国横断の情報交流、人材交流、事業交流、学術交流などの活発化、相互交流公演の機会創出がひいては各国センターの事業促進に益するのではないか――こうした話し合いが連盟結成を促す流れとなりました。

交流公演とアジア演劇祭開催

連盟規約で目的とされた事業は次の各項。

一、アジア各国の専業演劇団体、関係機関をメンバーとしてアジア演劇人のネットワークを構築し、その共同事業を支援する。

二、アジアの演劇芸術の創造的展開を支援し、「アジア演劇祭」の計画と実施を積極的に促進する。

三、連盟の機構を一つの作業台として提供し、各国のすぐれた作品と有為な演出家など人材の発掘につとめ、アジア演劇のデータバンクを構築する。

四、各国のすぐれた作品と人材が出会い、長期的な展望のもとで相互交流公演が可能になる環境とシステムを整備する。

五、各国の交流公演を受け入れる空間を提供し、各国センター相互、あるいは多国間の共同事業に道を開く。

六、国際公認の著作権及び知的財産保護条例を遵守する。

七、ＩＴＩ（国際演劇協会）と共同事業の関係を維持、推進する。

日本の3氏が常任理事に

連盟は十五人の常任理事と十人の理事で構成され、理事会の合議によって周志強（中国国家話劇院院長）氏が理事長に就任しました。主な常任理事はラメンデュ・マジュンダ（ＩＴＩ会長）、楊紹林（上海話劇芸術センター代表）、柏崇新（広東省話劇院院長）の各氏のほか、日本からは宮田慶子（新国立劇場演劇部門芸術監督）、伊藤巴子（日中演劇交流話劇人社理事長）、富永程波（日本中国文化芸術センター社長）の三氏、韓国からは孫振策（韓国国立劇院芸術総監督）、具滋興（明洞芸術劇場代表）の二氏が選任されました。

日本の4氏が専門委員に就任

また、連盟は次の七つの専門員会を常設し、宮田慶子氏は国際合作委員会委員長、富永程波氏は同委員、伊藤巴子氏は演劇創造人材委員会委員、菱沼彬晁氏（話劇人社事務局長・ＩＴＩ理事・日本ペンクラブ理事）は連盟執行委員会委員にそれぞれ就任しました。

▽国際交流委員会▽演劇創造人材委員会▽国際合作委員会▽演劇教育普及委員会▽交流公演委員会▽劇場情報委員会▽連盟執行委員会（連盟執行委員会の委員長は連盟理事長・中国国家話劇院院長の周志強氏）。

すぐれた劇作の翻訳センターを

連盟の活動の主要な柱の一つがアジア演劇のデータバンク構築です。このための専門チームを早期に立ち上げ、次の業務を手がけることになりました。

①各国センターに優秀作品の推薦を働きかけ、相当数の台本をプールする。

②各国センター共同の協力を得て、連盟内に翻訳センターを設立する。

③演出家や俳優の人材を発掘するために、情報交換の機関を設立し、各国センターの

合作のニーズに応える。

④各国センターに所属する劇場の設備と技術水準に関するデータバンクを構築し、各国センター使用の便宜に供する

中国国家話劇院との連携

連盟の事務局は中国国家話劇院内に置かれます。連盟機構常態化と安定的な運営のため、同劇院の附属劇場や設備、スタッフの実務を必要に応じて連盟に提供することになり、すでに連盟のホームページが立ち上がりつつあります。

連盟規約に唱われた「アジア演劇祭」の開催についても、国家話劇院との連携、あるいは同劇院をどう利用するかが決め手になりそうです。同劇院はすでに「アジア演劇祭」と「国際演劇シーズン」の国際演劇祭を主催しており、これらの舞台が連盟の各国センターにも提供されます。特に「アジア演劇祭」については、2年後の14年にアジア演劇連盟の主催に移行して、各国センターがプログラムを組み、独自の運営ができるよう支援策を考慮中。連盟の理事長でもある周志強院長は「議論より実行」と語り、各国センターの積極的な取り組みに期待を寄せています。

周志強中国国家話劇院院長

ナショナル・シアター同士の交流

中国国家話劇院を軸としたナショナルシアター同士の合作はすでに韓国、ベトナム両国との間で具体案が進行中で、台湾との「両岸連携」公演も実現に動いています。

日本の新国立劇場は中国現代劇の翻訳公演のほか海外との共同制作を多数手がけており、宮田慶子芸術監督は演劇人会議の席上、その経験を報告しました。外国との共同作業には相互理解のための時間と費用を惜しんではならないこと、異文化が触れ合う中で特に舞台監督に課せられる役割、通訳は両国から起用して意思の疎通に当たるべきこと、上演台本を作り上げる翻訳の重要性などに触れながら、2年先の企画を準備しなければならないことや近年の予算減など、経済的な対応に柔軟さが欠けるなどの悩みも語りました。

宮田慶子新国立劇場芸術監督

劇場と観客の厳しい関係直視を

アジア主要国のナショナル・シアターの代表や芸術監督が理事に名を連ねたことについて、伊藤巴子話劇人社理事長は次のように感想を述べました。

「ナショナル・シアターという栄光の名が同時に苦難の歴史を刻んでいることは、ヨーロッパ各国そして日本の例を引くまでもない。世界の演劇界を取り巻く環境が大きく変わり、劇場と観客の関係は厳しい緊張状態に置かれている。日本の演劇人がアジア演劇界の視野を得て、さらに世界へとつながる行動力に期待したい」と。

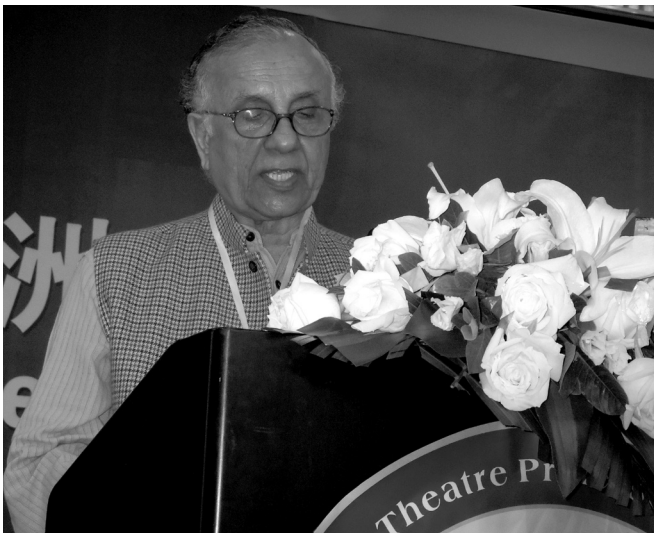
アジア演劇人サミット参加の国と地域は次の通り。イスラエル、カザフスタン、バングラデシュ、タイ、カンボジア、ベトナム、マレーシア、シンガポール、ブルネイ、フィリピン、台湾、韓国、日本、中国、香港ほか、北京＝中国国家話劇院、上海＝上海話劇芸術センター、広州＝広東省話劇院。

伊藤巴子話劇人社理事長

「アジア演劇人連盟」創設記念講演

ＩＴＩ（国際演劇協会）会長

ラメンデュ・マジュンダ



中国・重慶で開かれた「アジア演劇人サミッで講演するラメンデュ・マジュンダＩＴＩ会長

グローバリゼーションの波に抗して

世界の演劇人が相集い「足どりの中に踊りを声の中に音楽を見た」記憶を取りもどそう

ラメンデュ・マジュンダ氏（バングラデシュ）広告会社を経営しながら演劇創造を生涯の事業とし、演劇学校と劇団経営に参画。１９７２年に季刊の演劇専門誌を創刊。バングラデシュ演劇協会の初代会長。ＩＴＩバングラデシュセンターを自ら創設して会長となり、現在はＩＴＩ会長。

ラメンデュ・マジュンダＩＴＩ(国際演劇協会)会長は「アジア演劇人サミット」の冒頭で基調講演を行い、パフォーミングアーツのジャンルで世界最大のネットワークを持つＩＴＩの理念と活動内容を語ると共に「私はアジア演劇人連盟がＩＴＩのメンバーとなることを歓迎します。それはこの２つの組織にとって将来互いに有用となるに違いないと信じるからです」と述べて会場の喝采を受けました。次いで、生誕１５０周年を迎えたベンガルの詩人タゴールと中国の哲人・老子の言葉を引きながら世界を覆うグローバリゼーションの波に対して「足どりの中に踊りを、声の中に音楽を見た」記憶を取りもどそうと呼びかけました。以下はその抜粋です。（訳・小田切ようこ）

タゴール生誕１５０周年の年に

２０１１年は偉大なベンガルの詩人ラビンドラナット・タゴールの生誕１５０年記念の年です。タゴールは叙情詩人であると同時に劇作家であり画家であり社会改革者でもあり、１９１３年にアジアで最初にノーベル文学賞を受賞した人でもありました。

１９２４年、タゴールは中国を訪れ、次のように語っています。

「足どりの中に踊りを、声の中に音楽を、手足の舞う姿に美を見出している私たちの社会、神の創造物とともに調和を保ち続ける星々や花たちに深い暗喩を見ている私たちの社会は、今や貪欲の暴政に屈する社会になってしまった。まるでがらくたを積み過ぎたショッピングカートのようで、醜い轍（わだち）を道にのめり込ませ、行き着く先を見失ってしまう。ついにカートはばらばらに壊れ、積み込んだ品物もすべて失ってしまうのだ」と。

タゴールはまた中国の思想家、老子の「徳のある者には（道を行う）義務があり、徳のない者には（道を行わない）権利がある」という言葉（注）を引用しながら次のように書き残しています。

「進歩というものは、理想や徳目ではなく外面的な蠱惑（こわく）性と連れだって、我々の際限のない要求を満足させようとするものである」と。

今日の世界ではグローバリゼーションという言葉は、あらゆるものを包括する万能のキーワードです。政治家も経済学者もあらゆるところでグローバリゼーションの油を加えた演説を行っています。

タゴールと老子の言葉を心に留めて考えると、今日のグローバル化した世界を象徴するのは、強欲を自分のカートに積み過ぎた金融資本、声高に権利の自由を叫ぶ既得権亡者、強い者勝ちの格差社会、そして中国でも普及めざましい「便利店（コンビニエンス・ストア）」というところでしょうか。一方、世界の演劇人はいかなる〝徳〟を積み、いかなる義務を引き受けなければならないのでしょうか。

グローバル化した経済は国家の境界を消し去りつつある一方で、人々は共に集い「足どりの中に踊りを、声の中に音楽を、手足の舞う姿に美を見出した」記憶を奪われただけでなく、より暴力的で不信感の強い世界にいることを思い知らされています。そして、人々が共に集い、よりよい世界を築くのは、芸術の強さを通してのみ可能であることに気づかされています。

（注）老子の言葉　「老子」第八十一章「天の道は利して害せず＝天の道は万物を利するのみで害することがない／聖人の道は為して争わず＝聖人の道はすべての人々のために行い、しかもその功名を人と争おうとはしない」を指すものと思われる。潘基文（パンギムン）国連事務総長もこの言葉を引用して再任演説を行い「この不朽の智恵を今の仕事に生かし、百家争鳴の中から行動の統一性を見出したい」と訴えている。（傍点訳者）

未調査の過去、文化の再考を

世界中に存在する演劇コミュニティーにとって今必要なことは、国や地域や企業の私利私欲を除き、地理的次元の境界を取り去った演劇の空間を持ち、それを確実に存続させることです。そのためには歴史があらためて読み返され、侵略や植民地支配の再検証、さらに未調査の過去、見落とされた文化の再考も必要でしょう。人類が連綿と受け継いできた神話や民俗芸能の心に回帰することの大事さはいうまでもありません。その再解釈や演劇化によって人類が本来持っている〝芸術本能〟――創造の原点に触れることがで

きるでしょう。

アジアに生きている私たちでも、隣国の文化遺産に気がついていないことが多いのですが、注意深く見れば、その文化形態や表現の中に多くの共通点があることが分かります。アジア演劇連盟のようなフォーラムを立ち上げることにより、私たちには互いを知る機会ができ、西欧の人々には文化の多様性を理解する機会を提供することが可能になるのです。

私たち自身が潜在的に持つ文化の強さと他文化への関心を発見するために、ここで手を結びましょう、コミュニケーションと協力体制が私たちの連盟の主たるミッション（社会的使命）であるはずです。私は新しく立ち上がったこの連盟に次の提案をしたいと思います。

一、地域の演劇振興のために新しいテクノロジーとコミュニケーションの手段を利用する。

二、劇団あるいは演劇作品の相互交流公演企画を推進する。

三、地域あるいは地方に演劇祭の組織を根付かせレギュラー化する。

四、アカデミックな研究、フィールドワークの研究旅行その他のリサーチを奨励・推進する。

五、演劇季刊誌をウェブ上に英語で掲載する。

六、アジアの戯曲の英訳を推進する。アジアの主要な言語への翻訳も考慮する。

七、演出家、舞台技術者、舞台美術家、あるいは演劇を目指す人たちの活動を力づけサポートする。

八、伝統的なアジア文化の、特に村や集落などの演劇的催しの価値を認めサポートする。

九、歴史や神話などの再解釈を奨励しそれらを新たに演劇化し板に載せるよう努力する。

十、さまざまな地域の異なったパフォーマンス形態の多様性、特に現地のグループが保っている形態に注目しサポートする。

十一、学者・研究者・アーチストたちの自国以外での短期在住プログラムの実現をはかる。

十二、宗教劇の集団のパフォーマンス形態に注視し実践を奨励する。

十三、経済的社会的弱者といわれる人々の演劇参加を推進する。

十四、芸術的クオリティに関して妥協せず、演劇を教育と文化発展に連携させる。

十五、社会の中における芸術家の威信を高めるために働く。

演劇に携わることのプライド

私たちが生きるアジアでは多くの国々で、演劇で生活の糧（かて）を得ることができません。とはいえ、私たちは完全にプロフェッショナルな心構えで真摯に演劇を追求しています。演劇の中に生きる意義を見つけているからです。常に演劇は独裁や原理主義その他あらゆる邪悪な社会形態に対抗して闘う武器として私たちと共に存在しました。

その演劇に携わることは私たちのプライドであります。そして私は、私たちの新しい「アジア演劇人連盟」が世界に対しアジア演劇の新しい姿を描き出すものと確信しています。

第33回ＩＴＩ世界大会、中国・厦門（アモイ）で開催

大会テーマ パフォーミング・アーツに力を――中国伝統劇への旅

今大会で制定された
ＩＴＩの新マーク

本来ならば、２年に一度なので、昨年開催されるはずの世界大会ですが、これまでのＩＴＩニュースの記事にもありました通り、諸事情により開けずにいた大会が、２００８年のマドリッドから3年を経て、２０１１年9月19日より9月24日まで、中国政府、アモイ市のバックアップのもと、ＩＴＩ中国センター（中国戯劇家協会）のオーガナイズにより、アモイで開催されました。参加は、72カ国、４２０人で、前回より国数、人数とも増加となりました。日本からは、斎明寺以玖子副会長を団長に小田切国際理事、総勢４人が参加しました。（報告・松田和彦）

今大会のテーマは「Empowering the performing arts : A journey to Xiqu」というもので、いろいろな解釈ができるでしょうが、「パフォーミング・アーツに力を。中国伝統音楽劇への旅」といった意味になるかと思います。ＩＴＩの会長　ラメンデュ・マジュンダ氏、トビアス・ビアンコーネ事務局長ほかの大会冒頭挨拶に共通していたのは、世界中の演劇が連帯して、世界平和と相互理解の環境を促進することの必要性と、文化の多様性を維持しながら、違う文化との交流を図る重要性です。中でも、「ダイヴァーシティ」（多様性）という言葉は、総会、委員会で多くの発言者から発せられました。

大会冒頭挨拶に共通していたのは、世界平和と相互理解の環境を促進することの必要性と文化の多様性を維持しながら、違う文化との交流を図る重要性でした

財政基盤の強化など討議

全6日の日程の、第2、4、6日の午前が総会、2日目午後3日目午前で、各委員会、夜はすべて、京劇はじめ中国各地の戯曲（シイチユイ）（伝統音楽劇）、現代劇、ユネスコ・チェアによる成果発表劇など、各日1～4本の中から選択の観劇、その間に、ワークショップ、シンポジウム、レクチュアがあるという盛りだくさんの構成です。朝から晩まで

ぎっちりの日程にも関わらず、深夜には、ホテルや会場のアモイ国際展示場近辺の店では、飲み食べながらの国際交流も行われていました。

総会は、挨拶、過去3年の活動報告、入退会センター報告、各委員会・ワーキンググループ（コミュニケーション、演劇文化全般、ドラマ、ダンス、フェスティヴァル、モノドラマ、劇作家、音楽劇、国際製作、演劇教育、若者育成、人権）の活動報告と承認、増加するパリ本部の活動とそれを支える費用のため、不安定な財政基盤と引き続きの資金集め努力が謳われる財政報告と承認、規約改訂の説明と承認、新理事国の選挙、今後の活動計画と承認などです。

このような議事が、英仏同時通訳つき350人収容の会場で、国連タイプの世界組織と同じく、1国1票制度で進んでいきます。「シアター」という言葉をもつ組織が、このような世界大会を開いていることは、初めて見る人には壮観というほかないもので、「シアター」というものの世界での認知度と重要性に思い至ることでしょう。

「シアター」という言葉をもつ組織が このような世界大会を開いていることは 初めて見る人には壮観というほかないものでした

中国・厦門（アモイ）で開かれたＩＴＩ世界大会に出席した日本センター訪中団＝後列左から松田和彦（筆者）、大原典子、前列左から小田切ようこ、斎明寺以玖子の各氏と前列右端は韓国代表の辛一秀氏

小田切ようこ国際理事再任

新理事の選挙は、定数２０人に、２５人が立候補し、各候補がスピーチのあと、投票が行われ、規定の過半数を満たした１９人が選出されました。小田切ようこ理事も再任されました。

19人の出身国は、日本の他、バングラデシュ、米国、ドイツ、ジャマイカ、ロシア、中国、フジャイラＵＡＥ、スウェーデン、スーダン、フィリピン、スイス、韓国、スロヴェニア、ブルキナファソ、オランダ、ベルギー、メキシコ、キプロスで、落選したのは、カメルーン、チャド、セネガル、英国、クロアチア、ギリシャでした。新しいメンバーの理事国会議で、マジュンダ氏が会長に再任されました。

また大会中には、各国センターの事務局を対象にしたパリ本部との会議がもたれ、各センターの運営の仕方について、質疑が行われました。２００９年に制定された、各国ＩＴＩセンターが守るべき規則・ガイドラインの重要性が強調されました。

次回の世界大会は、２０１３年秋に、キューバのハバナで開催されます。

「心の奥深くが動く」体験

新生『この子たちの夏』に寄せて

渡辺　江美（地人会新社）

写真は昨年8月6～9日、世田谷パブリックシアターで上演された『この子たちの夏』（撮影・谷古宇正彦）

1985年、戦後40年の年に『この子たちの夏』は生まれました。演出家でこの作品の構成者、木村光一が以前のパンフレットにこう書いています。

「夏という季節は、そのきびしさがのびやかな解放感に裏うちされている美しい季節だ。とくに子供たちにとっては――。ランナウェイの夏休み。

しかし、今あらためて思うのだが、あの日の朝、広島・長崎の子供たちの多くは、すでに炎天下、汗まみれの労働の最中にいた――。勤労作業、あるいは戦時下の遅れた補修授業。沢山の子供たちが一瞬の閃光の下で集団で焼きつくされたのも、自分たち本来の美しい夏を返上して、何者かによって約束された未来のために奉仕していたからである。（後略）」

唯一の戦争による被爆国である日本の、日本人としての経験を記録でなく記憶に留めたいと、木村光一が膨大な資料の中からテーマを「母と子」に絞り、朗読劇としてまとめたのがこの作品です。

地人会解散後の空白を埋めて

演劇制作体地人会解散の2007年まで23年間に渡り続けられた本作品、地人会の解散と同時に上演の機会も失っていました。昨年、新たに（社）国際演劇協会の事業として新しい命を吹き返すことが出来ましたのは、彼らの死の上にある〝今〟を生きる私たちにとって、ことのほか重要なことであったものと思います。人間は簡単に忘れる動物でありますから。

そして再開にあたり、出演者が一斉に戦後世代となりました。時代は流れます。戦争を知らない人間がこれからを担う若者たちに伝えてゆく。演劇という表現形態だからこそなし得ること、そう信じ私たちは稽古から本番へと臨んだのです。

ここまで深く触れる、そしてこんなにも残された言葉と真剣に対峙し、何より「自分たちの心の奥深くが動く」という6名の体験が、すべてを新鮮にさせていたように感じます。それが確実に観客に伝わり、「今までにない感動を覚えた」という感想も多くいただきました。

3・11を経験してしまったからことさらだったかもしれません。しかし、状況説明から始まった細かな木村演出のもと、6名の女優は戦争の疑似体験をし、大切なものは何なのかを身体で受けとめ表現したからこそ、お客さまは新しい作品を見るかのごとく一人一人の生命の重さをそこに再発見したのではないでしょうか。

不幸な出来事が続きます。それを乗り越えてこそ人間です。そのために演劇人が出来ることを――。当然ともいえる使命を続けてゆかなければならない夏でした。

第２回ＧＡＴＳ（世界演劇学校連盟）フェスティバル

桐朋学園が参加して
北京中央戯劇学院で開催

越光照文
（桐朋学園芸術短期大学学長）

第２回ＧＡＴＳ（世界演劇学校連盟）フェスティバルが、２０１１年９月18日より27日までの10日間に渡って、中国の北京・中央戯劇学院（略称・中戯）で開催された。桐朋学園芸術短期大学は教員２名と学生12名およびスタッフ３名の総勢17名をもってこれに参加し、参加各国の演劇学校教員および学生たちとの交流を深めた。以下に、その報告を簡単にまとめておきたい。

課題戯曲『リチャード三世』を競演＝桐朋学園の舞台

ＧＡＴＳ（世界演劇学校連盟）とはGlobal Alliance of Theatre Schools の略称で、UNESCO Chair（ユネスコ移動演劇講座）ＩＴＩによって２００７年に設立され、08年の９月にスペインのバルセロナで開催された第５回世界演劇学校長会議およびマドリッドでの第32回ＩＴＩ世界大会において満場一致で採決・承認された組織である。

その目的はハイレベルな意味での演劇教育の経験やその成果を交換し、分かち合い、アカデミックな協力を涵養し促進することにある。また、ＧＡＴＳ（世界演劇学校連盟）フェスティバルは２年に一度、中央戯劇学院で開催されることになっており、今回は09年に続いての第２回目の開催であった。ＧＡＴＳ（世界演劇学校連盟）参加メンバーは、世界の演劇学校から14校（文末参考資料参照）が選ばれているが、いずれもその国においてはトップレベルの演劇学校ばかりで、本学がこれに参加できることは光栄の一語に尽きると共に、また本学の演劇教育を支える大きな励みともなっている。

課題戯曲『リチャード三世』

今回の第２回大会の参加校は、ドイツ、ブルガリア、ウクライナ、インド、韓国、中国、そして日本からは本学が参加し計７校の参加であった。参加校には課題戯曲としてＷ・シェークスピアから『リチャード三世』を、そしてその国の特徴あるオリジナル戯曲を１本用意してそれぞれ１時間以内にまとめ上演すること、加えて２時間30分程度のワークショップを主催すること等々が条件として課せられた。参加校が７校だったとは言え、連日にわたって各校それぞれの『リチャード３世』と各国の特色

を出した「ナショナル・パフォーマンス」の上演および「ワークショップ」が催され、誠に充実した実り豊かな10日間であった。

参加7校ともその舞台成果においては甲乙つけがたく、またワークショップの内容においても文字通り「ハイレベルな意味で演劇教育の経験やその成果を分かち合う」機会となった。我田引水になるが、本学の『リチャード三世』は終演時にはスタンディング・オベイションで迎えられ、ナショナル・パフォーマンスとして準備した『夕鶴』（作・木下順二）も大変好評を博したことをここに報告しておきたい。

09年の第1回フェスティバルにも本学は課題戯曲の『ロミオとジュリエット』及び『狂言・附子（ぶす）』をもって参加する予定であったが、折りからの、その年度に世界的に大流行したインフルエンザに本学の学生が罹患したため、出発の前日に参加を断念した経緯があり、その意味においても今回の参加は有意義な成果を得ることができた。また、最終日の閉会式におけるセレモニーでは最優秀演技者賞と優秀演技者賞が参加各校に1名づつ贈られ大いに盛り上がったフェスティバルとなった。なお、最優秀演技者賞の受賞者には中央戯劇学院に半年間ではあるが、無償で留学できる特典もあり、本学からも男子学生1名がその対象者になった。

桐朋学園のナショナル・パフォーマンス『夕鶴』の舞台

公演、ワークショップとも「ハイレベルな意味での演劇教育の経験やその成果を分かち合う」――GATSの目的にかなうものとなった

徐翔「中戯」院長の主導で国際交流

なお、GATS（世界演劇学校連盟）フェスティバルのホスト校を務めている北京・中央戯劇学院と本学との関係は長く、逆上ること既に1983年には演劇専攻を中心とする中国研修旅行が企画され中央戯劇学院を訪問している。その後、お互いの研修先として教員や学生を含めた密なる交流が10年余り続いたが、1990年代の後半からはその交流が一時途絶えていた。しかし、2008年にはやはり中央戯劇学院がホスト校となっているATEC（アジア演劇教育センター）の第3回大会において、主要メンバーであり幹事校としてもATECをリードしている日本大学芸術学部演劇学科の好意ある推薦を受けて、本学も準メンバーとして迎えられ、10年からは正式メンバーとして位置付くこととなった。それが切っ掛けとなり、再び中央戯劇学院との交流が復活したことは本学にとって誠に喜ばしいことであった。また、中央戯劇学院は徐翔学院長の主導のもとに積極的に世界の演劇学校間における交流促進の任を担って

おり、その努力にこの場を借りて敬意を表しておきたい。

演劇学校と劇場の提携を模索

ひるがえって、我が国における各演劇学校間の連携は誠に貧弱である、と言っても過言ではない。少子化による大学全入時代を迎え、それぞれの学校の学生確保が年々厳しさを増す状況にはあっても、お互いの利害を超え日本における演劇教育の発展・充実のために、各演劇学校間の連携とその組織化は必須の課題であるだろう。本学はその連携促進のためにも積極的にその任に当たりたい、と考える。ここでは未だ詳細を公表できる段階にはないが、最新の情報として、東京都内の有力な劇場と演劇コースを擁する大学から、本学を含めた演劇学校間の連携を模索する旨の要請が届いていることを報告しておきたい。また、これからは各演劇学校があるその地域の劇場・ホールとの連携促進も必要であろう。その意味で、本学の位置する地域には調布市が運営する「せんがわ劇場」が存しており、広義の意味での演劇教育・芸術教育を実践する拠点としての劇場であるべく、本学なりの提言を模索したいと考えている。

桐朋学園のナショナル・パフォーマンス『夕鶴』の舞台

以上を持って、簡単ではあるがＧＡＴＳ（世界演劇学校連盟）フェスティバルの報告および、我が国の演劇学校間の現状のレポートとしたい。

【参考資料】第２回ＧＡＴＳ（世界演劇学校連盟）フェスティバル参加校および加盟校は以下の通りである。

第２回ＧＡＴＳ（世界演劇学校連盟）フェスティバル参加校

The School of Dramatic Art "Ernst Busch",Germany （ドイツ）

National Academy of Theatre and Firm Arts – NAFTA, Bulgaria （ブルガリア）

National I.K.Karpenko – Karyi University of Theatre, Chinema and Television from Kiev, Ukraina （ウクライナ）

National School of Drama, India （インド）

Chung - Ang University, Theatre Department, Korea （韓国）

The Central Academy of Drama, China （中国）

Toho Gakuen College of Drama and Music, Japan （日本）

ＧＡＴＳ（世界演劇学校連盟）加盟校

Royal Academy of Dramatic Art, Britain （イギリス）

Ludwik Solski State Drama School from Krakow, Poland （ポーランド）

St Petersburg State Theatre Arts Academy, Russia （ロシア）

Institut del Theatre Barcelona, Spain （スペイン）

Veracruzana University from Xalapa, Mexico （メキシコ）

National Institute of Dramatic Art, Australia （オーストラリア）

Shanghai Theatre Academy, China （中国）

第23回伝統芸能ワークショップ

日本舞踊

国立能楽堂研修能舞台で行われた公開発表会（撮影・奥秋圭）

毎年夏に開催してきたＩＴＩの伝統芸能ワークショップは今年で23年目という長寿番組である。当初は外国人に日本文化を紹介し理解を深めるために行ってきたものが、12～3年前から、伝統芸能を学ぶことは日本人にこそ必要、当然備え持つべき素養であるとの考えから、日本人外国人混成の特色が認められて文化庁委託事業となった。今年は、さまざまな芸能と関連を持つ日本舞踊の実践を通して日本文化の総体を知ろう、という大きな目標のもとに進められ、ワークショップは8月10日から21日まで水天宮ピットで、公開発表会22日は国立能楽堂研修能舞台で行われた。（報告・小田切ようこ）

能舞台で公開発表会 長唄・三味線の〝生演奏〟で

洋楽の『ボレロ』にも挑戦

参加者は22名（そのうち外国人は7名―中国、韓国、ポーランド、ラトビア、ドイツ）。

講師は花柳寿美、花柳翫一、藤蔭静枝、勝美巴湖、花柳奈卯女、藤蔭瑠里娘の諸師。

練習に選ばれた曲は長唄の『菊づくし』『松の緑』『供奴』『手習子』『末廣狩』と日本古謡の『さくらさくら』のほか、日本舞踊のワークショップとして初めて洋楽にも挑戦、ラベル作曲の『ボレロ』が加えられた。

猛暑の中、毎日朝10時半から午後6時までの集中授業のような密度で稽古、さらに、講師の先生方が帰られた後も残って自主練習（稽古場は夜10時まで使えた）をするなど、「伝統」を捉えようとする受講生の情熱に接し、稽古場をあずかるＩＴＩスタッフにとっても清々しく気の引き締まる日々であった。

舞踊史と着物文化

初日、開講式の後に舞踊評論家の西形節子氏による日本舞踊の概論と舞踊史の講義から始まって、立つ・歩くなどの動作の基本の実習に移った。それらの基本がくまなく織り込まれているため初歩のメソッドとしてよく用いられる『菊づくし』の練習である。

2日目、着物文化を学ぼうと、着物の歴史や成り立ち・仕組み、気候風土による反物の特徴、環境・芸能との関係などについて簡単な講義の後、実際に自分で稽古着の浴衣を着る。着付け教室のように見えるがさに非ず。これがすでに舞踊の稽古始めな

のである。多様な帯の文化など、結ぶことの美学などが着る指導の合間に自然に入ってくる。次には着物の畳み方。ひと通り済んで着物が身に馴染んでくるにつれ、初心者の堅さがほぐれ、むしろゆとりが見えてきた。

7日目に「京舞」について山村流の山村若師が講義と実演、関東の踊りと関西の舞いの違いを学び、8日目は東音福田眞規師による「長唄と三味線」について。受講生は実際に三味線に触れ絃を弾いて音を出し古謡の『さくらさくら』に挑戦。

日本舞踊ワークショップの稽古風景
（撮影・後藤絢子）

稽古と講義の組み合わせ

9日目の「鳴物」の講義は藤舎千穂師ほかにより四拍子（しびょうし）の説明。三味線の渡来以前の伴奏はもっぱらこの四つ（小鼓、大鼓、太鼓、笛）のリズム楽器で行われており、笛（能管、篠笛）もリズムを受け持って、村祭のお囃子などにはこの四拍子が受け継がれているのだという。

実際に楽器を組み立てる過程を見たり実物に触れて拍子をとる機会など滅多にないことなので受講生は皆、興奮気味であった。

10日目は「衣裳」について。踊りの衣裳が歌舞伎舞踊の衣裳から発展し、省略されたり誇張されたりなど舞踊というジャンルのために変化し、基本の上に常に創意工夫があることなどを教わる。受講生からは、着物の「お端折（はしょ）り」はいつごろから一般的になったか、帯の「角出し」の結び方に見られる両側の「角」を出す高さは年齢でどう違うかなど質問を多発、関心の高さがうかがえた。

講義は午後の1時間半だけとはいえ充実し、稽古と併せたことはよい試みだったと思う。下浚いの日には地方（じかた）さんの生演奏とともに練習した。

課外には希望者が6時から9時まで3日間にわたり「殺陣（たて）」の稽古を、付け拍子も加えて（花柳翫一師指導）。また『手習子』では黒衣（くろこ）の練習もあった。

今回のワークショップで特筆したいことが二つあって、一つは藤蔭静枝師が創作舞踊として洋楽の『ボレロ』を振り付けたこと。東日本大震災で犠牲となった方々への鎮魂の思いを込めたものという。もう一つは地方さんの生演奏で踊る機会を得たことである。

橋掛りから登場して

発表会の日、能舞台の地謡座（じうたいざ）のところに緋毛氈を敷き、長唄・三味線の方々が並び、鳴物の先生方は下手の幕の向こう側で見えないがしっかり生の音が聞こえてくる。チョーンと柝（き）が入って橋掛りから踊り手が登場するなど、能舞台の催しとしてはかなりユニークなのだが、これが極めて自然に感じられるくらいに溶け込んでいた。

祝儀物の古典『松の緑』、娘の寺子屋からの帰り道の情景を踊りにした『手習子』、狂言から日本舞踊に取り入れられた『末廣狩』、現代を映す創作舞踊『ボレロ』等々、偏りのない内容とともに、舞踊周辺のジャンルにも触れる意義深いワークショップとなった。講師の方々に感謝致します。（テアトロ誌2011年10月号から転載）

「芸術と平和の構築」――ユネスコと共に

動乱と演劇

3大陸の3戯曲 日本初訳・初演で

リーディングとシンポジウム

2011年12月2日から4日まで東京神楽坂のイワト劇場で、3大陸3戯曲のリーディングとシンポジウム、トークによる「動乱と演劇」が開催された。いずれも日本初訳・初演、さらに中国とカメルーンの作品は「世界初演」ともなった。

（報告・林英樹）

近年のユネスコの大テーマである「芸術と平和構築」を受け、ユネスコ傘下のITI各国センターでは「紛争地の演劇」をテーマにした活動を活発に行っている。日本センターはこれに呼応、世界のITI活動との「連帯と絆」を深めることをめざし、「国際演劇年鑑」の調査研究事業の一環として、2009年から「紛争地域から生まれた演劇」シリーズを開始した。第1回は「バルカン半島」、第2回は「中東――パレスチナ・トルコ」を取り上げ、今年度は昨年までの流れを継承しつつ特定の地域に限定せず、時代とそのときどきの社会体制とが引き起こす軋轢や個人に与える過酷な現実を扱った作品を取り上げることとなった。

『ボイラーマンの妻』の舞台（撮影・奥秋圭）

『罠』の舞台（撮影・奥秋圭）

『ナパジ／ナパジ』の舞台（撮影・奥秋圭）

中国 作／莫言

『ボイラーマンの妻』

訳／菱沼彬晁　演出／青井陽治

今回、取り上げられた中国戯曲『ボイラーマンの妻』（原題／鍋炉工的妻子、作／莫言、訳／菱沼彬晁、演出／青井陽治）は、文革期に農村で出会った農民青年とピアノ教師の妻の物語。夫婦は今は都会に住み、夫はボイラーマンの仕事に就くが、集中暖房への転換のため失業する。妻は農村に下放された時期、恋愛関係にあった作曲家がいたが、ある演奏会で彼と再

会した。日本をはじめ世界各国で多数の小説が翻訳され、ノーベル賞候補の呼び声が高い莫言だが、戯曲はわずか3作しかなく、本作品はその一つで本邦初訳。

シンポジウム「文化大革命と中国演劇」でパネリストの菱沼彬晁氏は、莫言の小説『牛』に言及し、文革期の農村での牛の扱われ方と福島の牛を重ね合わせ、社会の末端と下部の視点から人間の所業を問うた。また飯塚容氏は20世紀の中国を動乱の歴史から捉え、日本の関与も含めて歴史的な視点から中国演劇の現状を語られた。

カメルーン　作／クワン・タワ

『罠』

訳／佐藤康　演出／小川絵梨子

カメルーン戯曲『罠』（原題／La Trappe、作／クワン・タワ、訳／佐藤康、演出／小川絵梨子）は、かつて美しい都であったアフリカの架空の国の都エボリを舞台にした作品。民主化革命のとん挫により元教師は反乱罪で投獄され、いまは物乞いをしているが、そこで同じように故郷を追われた元医師や元歌手と出会う。国の貧しい現状や自身の厳しい境遇にも関わらず、彼らは決して現実変革の夢を諦めない。

シンポジウム「アフリカ演劇の現在」で鴻英良氏は、アフリカ伝統の口承文化の基盤の上に、ヨーロッパの対話法が重ねられ、現在の人々が直面している問題をより自覚化させている本作の特徴を指摘した。アフリカの演劇では、危機的状況を生きる人間が問われ、かつ芸術家と芸術の使命が問われている。企画終了後、上演に参加した若い俳優たちが、改めて自分と演劇の関わり方を見つめ直したいと語った。なぜ、自分は演劇をやっているのか。自分たちの存在意義や政治的意味、社会問題を再認識する機会となったようである。

オーストラリア　作／トレヴァー・ジェイミソン　スコット・ランキン

『ナパジ・ナパジ』

訳／佐和田敬司　演出／和田喜夫

オーストラリアの『ナパジ・ナパジ』（原題／Ngapartji Ngapartji、作／トレヴァー・ジェイミソン、スコット・ランキン、訳／佐和田敬司、演出／和田喜夫）は、公式の歴史で隠された事実を、先住民独自の口承文化をベースに、語り芝居として現代化された作品。２００２年のハンブルグ、カンプナーゲルのラオコーン・フェスティバル、アデレード・フェスティバルなど数多くの国際演劇祭で上演されてきた。

１９５３年から56年にかけ、サウスオーストラリア州奥地の砂漠地帯で行われた英国の核実験、６００回に及ぶテストで、９個の核爆弾が炸裂した。そしてそこに住む先住民の多くが被爆した実話に基づく。本作は個人史から歴史の問い返しを試みる問題作であり、被爆したヒロシマの女性も登場し、核の問題は個別の国のことではく、人類共通のテーマであることを改めて認識させられることとなった。

トロイ戦争を題材にしたギリシア悲劇『オレステイア３部作』では「憎しみの連鎖」は、突然の「デウス・エクス・マキーナ」（機械仕掛けの神）によって終演になる。これは神の手では終焉しないという意味でもある。人間の力で何とかしろよ、と問いかけているのだとも受け取れる。繰り返される「過ち」は地球単位では現在形であり、未来にも終焉しないかもしれない。けれど、問いかけ続けることは無駄ではない。芸術の意味・根拠はそこと結び付いている。改めて演劇の存在理由と根拠を考える３日間となった。

日独交流150周年の年に

ITI世界の秀作短編研究シリーズ ドラマリーディング・ドイツ編

日独交流150周年にあたる2011年、「ITI世界の秀作短編研究シリーズ」では「ドラマリーディング ドイツ編」と銘打ち、12月16～20日、リーディング公演を開催しました。総観客数は延べ650名ほど、全作品有料観劇者数も15名ほどと、たくさんのお客様にお運びいただきました。東京ドイツ文化センターと劇団黒テントには、会場と稽古場の協力をいただき、その多大なご支援に、この場を借りてあらためて御礼申し上げます。（報告・庭山由佳）

ベルリンの壁崩壊後 ドイツ同時代演劇

5チーム6作品

この秀作短編研究シリーズは2006年3月のフランス編に始まり、08年3月のイギリス編、また震災の影響で中止せざるをえなかった11年3月にはイギリス・アイルランド編、と歴史を刻んできました。イギリス・アイルランド編の断念は苦渋の選択で、その悔しさを胸に、このドイツ編の制作に取り組みました。

『イドメネウス』の舞台（撮影・奥秋圭）

ドイツ編は5チーム6作品という態勢で、監修として新野守広氏にご参加いただきました。作品選定テーマは「ベルリンの壁崩壊後のドイツ演劇」。同時代に生きるドイツ語圏の劇作家たちが向き合っている世界をどう描くか、同じく同時代に生きる若手演出家たちに委ねました。

「画の描写」「言葉のない世界」は、ハイナー・ミュラーとデーア・ローアーが師弟関係にあったので、弟子が師匠へのオマージュとして書いた作品を師匠の作品と組み合わせて。

「キック」は近年確立されたドキュメンタリー演劇の先駆けで、新国立劇場現代戯曲研究会より翻訳提供を受けました。

「光のない。」

ノーベル賞作家・イェリネク最新作

福島第一原発を描く

「光のない。」はオーストリアのノーベル賞作家イェリネクが福島第一原発について書いた最新作で、フェスティバル／トーキョーより翻訳協力を受けました。

「イドメネウス」は、来日経験のあるシンメルプフェニヒによる古典の改作。

「氷の下」は現代人の葛藤を描いた作品で、新野氏の近著（翻訳）。それぞれに個性的で75分以内の短編というラインナップは、こうして選ばれました。

また、ローアー本人とイェリネクの著作の出版元からは上演権利料支払いが免除されていることを記しておきます。ローアーには来日経験があって東北・福島の現状を心から憂えており、イェリネクは素材そのものが福島であることから出版社が判断しました。これは、私がベルリンドイツ座で研修をしていた頃に知り合った、ベルリンドイツ座ドラマトゥルク部長やITIドイツセンター事務局長の尽力によるものです。

こうして作品は決まり、稽古が始まりました。難しかったのは、訳し下ろし作品の上演台本作成作業でした。専門家にドラマトゥルクとして立ち会ってもらいながら、作家の意図を客席にまっすぐ伝えるにはどう言葉を選択すべきか、ここに重点を置き、話し合いました。

例えば、「イドメネウス」には「AとOの文字を発明した」というくだりがあります。日本人にとってのアルファベットは、AからZまでのローマ字のことですが、ここではα（アルファ）からΩ（オメガ）までのギリシャ文字のことです。更に、聖書にはキリストの言葉として「私はAとOである」との記述があり、ドイツ人なら「AとO」と聞けばそれだけで、「万物を指すもの」と解釈するのです。それらをどう伝えるのか、ドラマトゥルク・演出家・出演者と稽古の中で話し合う作業は、そのままドイツ語圏の文化について知る作業と同義でした。

また、翻訳者・研究者の皆様にいただいた学術的サポートが今回の企画の成功に大きく関わっています。まず、連携企画として開催した中央大学招聘のバイヤーデルファー教授（ミュンヘン大学演劇学研究所）によるワークショップ。「戯曲の復活：現代の戯曲作家とその作品（ローアーとシンメルプフェニヒを中心として）」と題し、ローアーとシンメルプフェニヒの近作を上映、劇作と演出のポイントを共有しました。演出家・出演者も参加し、ドイツ語圏における当該作家の立ち位置も確認できました。

翻訳者の皆様は、当日に配布した作品解説の執筆と、アフタートーク、シンポジウムへの登壇についても全面的にご協力下さり、作品と作家に対するより深い理解を促して頂きました。トークには他に、演出家・出演者も登壇、客席からは賛辞も疑問も飛びましたが、トーク中にお客様同士が直接会話して議論を解決する場面もあり、トークの意義が再認識されました。

今回は多くの劇場関係者にもお運びいただきました。この短編リーディング上演により作家が知られ、その作家の長編作品が本公演でかかってゆくことを願ってやみません。ドイツ語圏文学紹介雑誌Deliの次号にて、劇評が大きく掲載される予定です。どうぞお手に取ってみて下さい。ご協力・ご観劇くださった会員の皆様に、心より御礼申し上げます。

坂東玉三郎丈、第27回京都賞（稲盛財団）受賞

世界の科学や思想・芸術に貢献した人に贈られる京都賞（思想・芸術部門）を、五代目・坂東玉三郎丈が受賞されました。

歌舞伎の女形の美の造形ばかりではなく、梨園の出でないにもかかわらず立女形の地位を確立した力、新派や現代劇、和太鼓グループ、モーリス・ベジャール、アンジェイ・ワイダ、ミハイル・バリシニコフとのコラボレーション、共演など、近年は中国江蘇省蘇州昆劇院で「牡丹亭」に主演、中国での昆劇の活性化に貢献するなど、ジャンルを超えた国際的活躍が高く評価されたものです。

表彰式は11月10日、国立京都国際会議場で行われました。

京都国際会議場で行われた表彰式（C）稲盛財団 2011

会員消息（順不同　敬称略）

入会

辰巳次郎　俳優・舞台監督
福冨はつみ　劇団山の手事情社
宗重博之　劇団黒テント
砂川幸子　東宝株式会社
高安美帆　俳優（HMPシアターカンパニー）

後藤絢子　退会

川瀬白秋　田野暦子
関　容子　斎藤恵美
白川宣力　原珠真子
浦野進　鈴木宗夫

原田広美　ご逝去

森　康尚　大野　晃
松浦光次郎　長門裕之
菅井幸雄　中村芝翫
岩井半四郎

受賞

中村翫雀　第32回松尾芸能賞優秀賞
坂東玉三郎　第27回京都賞思想・芸術部門

襲名

竹本綱大夫より竹本源大夫へ襲名されました。
（平成23年1月～12月分）

壽 初春大歌舞伎
平成24年1月2日(月)初日▼26日(木)千穐楽
製作 松竹

◆昼の部（午前11時開演）
一、相生獅子
祇園祭礼信仰記
二、金閣寺
三、加賀鳶
河竹黙阿弥作
盲長屋梅加賀鳶
本郷木戸前勢揃いより赤門捕物まで

◆夜の部（午後4時30分開演）
一、歌舞伎十八番の内 矢の根
大薩摩連中
二、連獅子
三、神明恵和合取組
五建中村富十郎一周忌追善狂言
河竹黙阿弥作
め組の喧嘩
品川鳥崎楼より神明末社裏まで

新橋演舞場
〒104-0061 東京都中央区銀座6-18-2
電話 03(3541)2600 地下鉄「東銀座」「築地市場」駅下車
松竹ホームページ http://www.shochiku.co.jp
歌舞伎公式サイト「歌舞伎美人」http://www.kabuki-bito.jp

御観劇料（税込）
1等A席 16,000円
1等B席 11,000円
2等A席 9,000円
2等B席 5,000円
3階A席 5,000円
3階B席 3,000円
桟敷席 17,000円

【相生獅子】
姫　魁　春
姫　芝　雀
【金閣寺】
北ノ庄太郎左衛門尉　梅　玉
雪　姫　菊之助
十四郎　実は佐藤正清　錦之助
松永弾正久秀　松　江
好野之介直信　歌　六
慶寿院尼　東　蔵
松永大膳　三津五郎
【加賀鳶】
天神町梅王　菊　五郎
竹垣源蔵　時　蔵
女按摩お幸　時　蔵
春木町巳之助　三津五郎
勉　勇　次　又五郎
虎屋竹五郎　菊之助
豆ヶ子尾之吉　菊之助
三ツ星半次　亀　三郎
髭石松　松　江
数珠玉周吉　亀　三郎
御成門の鶴吉　亀　寿
金助町兼五郎　松　也
仲　又　八　男　寅
お　朝　梅　枝
妻恋音吉　権　十
天狗杉松　秀　調
御神輿弥太郎　東　蔵
道玄坂周七ヒラ　團　蔵
伊勢屋与兵衛　彦三郎
雷五郎次　左團次
日蔭町松蔵　吉右衛門

【矢の根】
曽我五郎　三津五郎
大薩摩主膳太夫　歌　六
馬士坂右衛門　秀　調
曽我十郎　田之助
【連獅子】
牡丹の精　吉右衛門
獅子の精　鷹之資
獅子の精　錦之助
僧蓮念　錦之助
僧遍念　又五郎
【め組の喧嘩】
お　竹　時　五郎
お相撲五郎　菊　五郎
居候侍鳥取ゑり　蔵
九竜山退治金時　芝　雀
柴井町勝松　又五郎
伊田子の安三　松　江
背高の竹　亀三郎
三ツ星半次　寿
おもちゃの文次　松　也
御成門の鶴吉　光　寅
仲　又　八　藤間大河
芝浦の銀蔵　桂　三
神路山在五郎　由次郎
神田川町長次郎　権十郎
宇田川町長次郎　萬次郎
島崎惣右衛門　萬次郎
隠居杉亀右衛門　團　蔵
江戸座重太郎　彦三郎
四ツ車大八　左團次
梵出り喜三郎　梅玉

12月12日(月)10:00より 電話予約・Web受付開始 ※売切日 1月6日昼の部
チケットホン松竹 ナビダイヤル 0570-000-489 または03-6745-0333
（午前10時～午後6時） 窓口販売、お引取りは、12月14日(水)午前10時より ※窓口販売用別枠でのお取置きはございません。
チケットWeb松竹 （パソコン・携帯電話より24時間受付 発売初日は10:00から） チケットWeb松竹 検索

東日本大震災に支援の「連帯」

世界のITIが「HELP JAPAN」キャンペーン

3・11の直後、ITIの世界中のセンターから見舞いのメールが日本センターに続々と届き、仲間たちの強く暖かい連帯感が示されました。

スロヴァニアセンターはいち早くITIのワールドネットワークを通じて「HELP JAPAN」のキャンペーンを打ち出し、「信じがたいダメージを受けた日本と日本のアーチストたちが立ち直るために」と、広く「支援の連帯」を呼びかけました。

ドイツセンターとベルリン・フンボルト大学の森鴎外記念館は、チェルノブイリ事故から25周年となる2011年4月26日にドイツ国内すべての劇場で終演後に観客へ募金を呼び掛けるよう提案しています。

「HELP JAPAN」は直ちにスロヴェニア、キプロスを中心に1600ユーロが集まり、パリのITI本部と日本センターを経由して仙台に震災後設立された演劇復興組織「アートリバイバルコネクション東北」に送金されました。

また、フランクフルト市の近くのヴィスバーデン市で開催された「メイ・フェスト（5月祭）」に、福島から2人のダンサーの参加があって話題となりました。主催者は公演後に集まった義捐金を福島のダンサーとダンスの組織に特化して贈りたいが、参加者の名前も組織も分からないので調べてほしい旨、ドイツセンター会長から依頼があり、ようやく調べがつきました。メイ・フェスト主催者の思いもやがて福島に届くことでしょう。

劇場関係の復興には資金援助だけでなく、精神的な支援も大切ということで、いくつかのセンターから舞台技術者の留学を受け入れる、日本特集の催しを試みる等々の申し出がありましたが、いずれも震災から間もない困難な時期であったため、残念ながら実現していません。

震災が人々に「絆」という思いを喚起させたのは、被災地だけではなく、世界の演劇人たちも創作活動と共に「絆」を思い、「連帯」を思い、演劇の輪で支え合おうとしています。

一方、チェルノブイリ事故25周年の募金はトータル12、500ユーロにのぼり、これも「アートリバイバルコネクション東北」に送られています。世界が東北を応援しています。

帝劇の客席がいっせいに涙した「究極の愛」を描くミュージカル超大作！新演出版にて2012年、全国11都市公演決定!!

【エンジニア】市村正親　【キム】笹本玲奈　【キム】知念里奈　【キム】新妻聖子（＜交互出演＞）　【クリス】原田優一　【クリス】山崎育三郎（＜交互出演＞）　【ジョン】岡幸二郎　【ジョン】上原理生（＜交互出演＞）　【トゥイ】泉見洋平　【ジジ】池谷祐子

TOHO CO., LTD. PRESENTS
CAMERON MACKINTOSH'S
NEW PRODUCTION OF
BOUBLIL & SCHÖNBERG'S
LEGENDARY
MISS SAIGON

ミュージカル
ミス・サイゴン
作=アラン・ブーブリル&クロード=ミッシェル・シェーンベルク
オリジナル・プロデューサー=キャメロン・マッキントッシュ
製作=東宝

※公演内容に関するお問い合わせ先
帝国劇場内「ミス・サイゴン」係　TEL03(3213)7221
詳しくは東宝公式ホームページをご覧ください。
東宝演劇　検索

めぐろパーシモンホール開館10周年記念
めぐろパーシモンホール（大ホール）〒152-0023 東京都目黒区八雲1-1-1 TEL 03(5701)2904
2012.7／6(金)-7／8(日)
プレビュー公演(7月1日(日)～5日(木))
4月14日(土)チケット発売開始
料金(消費税込)S席12,500円、A席 7,500円
プレビュー公演料金(消費税込)S席11,500円、A席 6,500円
主催：(公財)目黒区芸術文化振興財団・東宝

青山劇場
〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 5-53-1 TEL 03(3797)5678
2012.8／22(水)-9／9(日)
6月2日(土)チケット発売開始
料金■ S席12,500円　A席 7,500円(消費税込)

海外ニュース

◆ 第 30 回ファジル演劇祭

2012 年 1 月 25 ～ 2 月 11 日 / テヘラン（イラン）

イラン・ドラマ・アート・センター主催

contact : Vahdat Hall, Ostad Shahryar st.,Hafez Ave., Tehran,1133914934,

Iran tel: +9821-6670-8861 Fax +9821-6672-5316 dac@neda.net

◆ 国際ビュヒナー フェスティバル

2012 年 2 月 19 日のゲオルグ・ビュヒナー没後 175 年記念にあたり、ビュヒナー作品をベースにしたプロジェクトの提案を募集します。フェスティバルは 2013 年 10 月、ギーセン（ヘッセン州のフランクフルトの近く）

contact : buechnerfestival@stadttheater-giessen.de

◆ 第 1 回ベイルート国際児童演劇祭

2012 年 3 月 20 ～ 30 日（健康と環境）、3 月 31 日～ 4 月 9 日（イマジネーションと創造性）、4 月 10 ～ 20 日（平和とリーダーシップ）

レバノン観光省主催、Scenez Group production 制作

contact : info@scenezgroup.com, limlufestival@hotmail.com

tel : +96170-111096 contact person : Christina Chammas

◆ コンテンポラリー ドラマ フォーラム

ITI ギリシャセンター主催 。過去 5 年間に書かれた戯曲のリーディング上演。

2012 年 5 月、アテネ

contact : forum@hellastheatre.gr

◆ イエテボリ・ダンス演劇フェスティバル

2012 年 5 月 18 ～ 27 日 / イエテボリ（スウェーデン）

contact : info@teaterunuonen.se（ITI スウェーデンセンター）、

www.festival.goteborg.se

◆ 第 16 回ギリシャ古典劇国際演劇祭

2012 年 7 月 1 ～ 31 日 / リマソル、ニコシア（キプロス）

ITI キプロスセンター主催、キプロス教育文化省・キプロス政府観光局助成

アダプテーションではなくオリジナルのギリシャ悲劇・ギリシャ喜劇の上演

参加を歓迎します。

Contact : Cyprus Centre of ITI---
38, Regaena Str., 1010 Nicosia, Cyprus

Tel : +357-22-674920 fax : +357-22-680822 ccoiti@cytanet.com.cy

Contact person : Neophytos Neophytou

◆ ストックホルム文化祭

2012 年 8 月 14 ～ 19 日 / ストックホルム（スウェーデン）

info : www.kulturfestivalen.stockholm.se

◆ 第 9 回国際女性劇作家コンフェランス

2012 年 8 月 15 ～ 21 日 / ストックホルム（スウェーデン）

info : www.wpinternational.net

◆ イングマル・ベルイマン国際演劇祭

2012 年 5 月 27 ～ 66 日 / ストックホルム（スウェーデン）

info : www.bergmanfestivalen.se

会員参加で内外の活動強化を

ITI 国際演劇協会
日本センター会長
永井　多恵子

新年おめでとうございます。多事多難の年が明け、今年こそ会員の皆さまにとって素晴らしい年になりますよう、祈念申し上げます。

今号のトップ記事は内村直也賞です。19年の歩みと受賞者たちのめざましい成果をまのあたりにし、内村賞がまさに「世界の内村賞」として高い評価を得ていることを実感しました。ITI日本センターとして誇りに思います。日本の文化と世界の舞台芸術に寄せる内村直也氏の深い思いに敬意を表し、ご遺族にあらためて感謝申し上げます。

東アジア18の国と地域が参加してITI加盟を視野に入れた「アジア演劇人連盟」の創設も心強いニュースとなりました。ITIが国内の活動を充実させると共に、アジア演劇人連盟など諸団体との連携を密にしながら世界へ羽ばたくためには会員お一人お一人のご参加とご尽力がどうしても必要です。

越光照文桐朋学園芸術短期大学学長からGATS（世界演劇学校連盟）フェスティバル＝北京公演のご寄稿をいただきました。GATSは世界14の演劇学校の連盟で、ITIの国際活動の一翼を担っています。氏は「我が国の演劇学校間の連携はまことに貧弱」と嘆き、劇場と演劇大学との連携を模索中とのこと。日本の演劇大学の積極的な国内外の交流を願ってやみません。

ITI平成23年度通常総会で、公益社団への移行をめざして準備を進めることが承認されました。新法人への移行にあたっては、現社団法人総会で構成員の4分の3以上の賛成を得る必要があります。会員の皆様のご理解とご協力をいただけますようお願い申し上げます。

菱沼理事が新しく編集に加わって誌面が一新しました。ITIの活動が会員に生き生きと伝わることを期待しています。

ITIニュースNo.122　主な内容

▽第19回内村直也賞、スウェーデンの舞踏グループSU-ENに……1
▽「公益社団法人」設立総会へ向けて……3
▽国際演劇協会平成23年度総会報告……4
▽「アジア演劇人連盟（ATA）」ITI加盟を視野に発足……5
▽ラメンデュ・マジュンダITI会長「アジア演劇人連盟」創設記念講演……8
▽第33回ITI世界大会アモイで開催……11
寄稿
▽新生『この子たちの夏』に寄せて／渡辺江美（地人会新社）……13
▽GATS（世界演劇学校連盟）フェスティバル＝北京公演報告／越光照文（桐朋学園芸術短期大学学長）……14
事業報告
▽第23回伝統芸能ワークショップ＝日本舞踊……17
▽「動乱と演劇」リーディングとシンポジウム……19
▽世界の秀作短編研究・ドラマリーディング＝ドイツ編……21
▽坂東玉三郎丈、第27回京都賞思想・芸術部門（稲盛財団）受賞……23
▽世界のITIが「HELP JAPAN」キャンペーン……24
▽海外ニュース……25

編集後記

▲平成24年は、新しい公益社団への移行が大きな課題です。ITIの活動は世界各地の演劇舞踊文化の相互理解を深めることで多様な文化的価値を継承・創造するものです。この分野の交流を通して、日本と世界をつなぐ役割を今後さらに充実させていきたいと念願しています。（曽田修司）

▲銀杏がなかなか色づかず、すぐに黄色から枯葉色になり、ギンナンも落ちない、など感じつつITI通い。寒さが続きます。皆さま、ご自愛下さい。（小田切ようこ）

▲レイアウトを担当しました。ITIはいい仕事をしている。多くの人に知ってほしい――そんな手応えを感じています。（菱沼彬晁）

（© 国際演劇協会日本センター 2012）

I.T.I.　第122号
2012年1月15日発行
発行　（社団法人）国際演劇協会（ITI ユネスコ）日本センター
発行人　永井多恵子　編集人　曽田修司
〒151-0051　東京都渋谷区千駄ヶ谷 4-18-1 国立能楽堂内
Tel03-3478-2189 Fax03-3478-7218
Email:iti@topaz.dti.ne.jp
http//www.green.dti.ne.jp/~iti/